

ピエールは恐怖のオレンジを好む レヴィナス・サルトル・ナンシー、 ファンタスティックなものへのアプローチ

Pierre-Aimé le Horangeux, Lévinas-Sartre-Nancy: Une Approche du Fantastique en Philosophie

カトリーヌ・マラブー 訳 藤原佳以

Catherine Malabou / trans. Kai Gohara

私がここで試みるのは、ファンタスティックなものの問題を哲学のなかに位置づけることである。この問題に関して、すでにレヴィナス、サルトル、ナンシーという三人の偉大な先駆者が決定的な素描を行なっている。私はまず手始めに、哲学におけるファンタスティックなものとはこれではないとかあれではありえないなどと文学におけるひとつの「ジャンル」のようなものを述べる代わりに、むしろ最初から、それがどのようなものになりそうであるかを示唆しておきたい。すなわち、それは存在論的、差異の現実と私が名づけるものを規定するような新しいカテゴリーである。実際、ファンタスティックなものとはある種の様態の現実、後に詳しく見るように、現実を超過し逸脱した現実を指し示している。

その名にふさわしいファンタスティックなものがいずれもそうであるように、哲学におけるファンタスティックなものも、驚異的なものの現実の侵入、あるいは、異質なものの現実への侵入、現実のなかにへの侵入である。とはいえここでは、現実に対する超過は、それが由来する存在論的な問題構成、およびそれが規定する現象に送り返されねばならない。すなわち、存在論的差異の現実における現われである。ファンタスティックなものとはこの現われ、つまり存在と存在者の差異の現実なのである。この現実を、レヴィナス、サルトル、そしてナンシーは三人とも——この奇妙なグループ編成はここに由来するのだが——、「実存 [existence]」と呼んでいる。

ファンタスティックなものとは、存在と存在者の差異の現実として、構想された実存である。「定義」——もしこれが定義だとすれば——はこれで完璧である。そして、私たちのコロッケのテーマは「意味」、意味の問題であるのだから、私の意図はもうおわかりでしょう。私はここで、私なりの仕方、実存の意味について、少なくともこの実存の意味について問い質してみたいのである¹⁾。

先ほどの「定義」に戻ろう。ファンタスティックなものとは、存在と存在者の差異の現実として構想された実存である。この定義においては、つづことが目を引く。まずもって、「ファンタスティック」という語の語源に含まれた——ファンタスマ [イメージ]、ファンタステイケー [イメージ制作術]——イメージとの関係である。もうひとつは、ハイデガーへの参照である。もちろんこの参照は、ひねりを利かせたねじれた参照であるが、このねじれはまさに、レヴィナス、サルトル、ナンシーの思想がハイデガー哲学との間に有している遠さと近さを表わしている。ファンタスティックなものについての私の定義において、ハイデガーへの参照は複数の意味でねじ

れている。第一に、ハイデガーは一度たりとも存在論的差異の現実については語っていない。彼はおそらく現実についてさえまったく語らなかった——実在性 (actuality) と現実性 (Wirklichkeit) という二つの概念は、周知のように「存在と時間」[四三節]の時点で脱構築されている。第二に、その結果ハイデガーは一度たりとも、伝統的形而上学におけるように、「実存が「現実」のような何もかを指し示し続けることができる」とは考えなかった。最後に、イメージと構想力の位置づけを明確にすることに心血を注いだハイデガーは、イメージ (das Bild) をたんなる「幻想」²⁾と混同することも、構想 [思想] (die Einbildung) を風変わりな空想 (Phantasie) と混同することも絶対になかった。しかし、と人は反論するだろう、レヴィナス、サルトル、ナンシーも混同したりはしていない！と。しかしながら、彼らの著作を精読すれば、次のことが明らかになるだろう。すなわち彼らは、イメージと構想力をめぐるハイデガーの思想を転位させ、同時に存在論的差異の意味をも転位させ、さらに同時に、実存の意味を別の構想力 [想像力: imagination]、別の差異、別